

仙台市文化財調査報告書第85集

宮城県仙台市  
愛宕山装飾横穴古墳  
発掘調査報告書

1985年8月

仙台市教育委員会

あたごやま  
**愛宕山裝飾横穴古墳**

仙台市教育委員会



## 序 文

昭和51年、都市計画街路工事中に発見された横穴古墳でありまして、仙台市においては初めて発見された装飾横穴古墳であり、かつ唯一のものであります。幸い、当時の道路工事の際は、車道と歩道予定地から若干はずれていたため、現在も地下に仮保存措置をしたうえで埋めもどされています。

当横穴周辺は、仙台市内におきましても、横穴古墳が数多く存在している地域であり、これまで調査されました宗禅寺横穴古墳、愛宕山横穴古墳B地点に加えて新たな資料となっています。今回の発見は、横穴古墳の研究のみならず、全国的にも装飾壁画の研究の貴重な資料として価値ある発見の例と考えます。また、そのような一つ一つの対象物として把えるだけでなく、集落跡との関係や、古墳時代末期頃の社会体制を研究するうえでも貴重な資料といえます。

調査以来、9年の歳月が流れましたが、今度やっとのことでの調査資料の公開にこぎつけることができましたこと、調査主体者として誠によろこばしいかぎりであります。

本市には多数の遺跡がありますが、市街化の波の中で、いかに歴史的風土を保護し、都市計画の中に活かしていくかは、文化財保護行政に課せられた大きな課題であると考えます。

この報告書はそういう文化財の保護、普及、啓発事業の一端として、本遺跡の発掘調査の成果をここに公開するものであります。本書が多くの方々に御活用いただけたことを願ってやみません。

最後に、発掘調査及び報告書刊行に際しましては、伊東信雄先生はじめ大勢の方々の御協力をいただきました。ここに心から感謝申し上げ、序といたします。

昭和60年8月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本報告書は仙台市向山四丁目97-5地内所在の、愛宕山横穴古墳C地点1号墳の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の実測図中の方位は磁北で統一しており、真北方向に対して西偏7°0'である。
3. 本報告書第2図は国土地理院発行の「仙台東南部」1:25,000を使用した。
4. 本報告書中実測図のレベルは標高を現わす。
5. 本報告書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・佐原:1970)を使用した。
6. 人骨の鑑定は、東北大学医学部の紹介で、獨協医科大学に依頼した。
7. 本報告書の編集、執筆は調査担当者・伊東信雄の指導により結城慎一が担当した。なお、付録については、獨協医科大学の馬場悠男、茂原信生ほかが担当している。
8. 本報告書I-2に調査参加者等の調査体制を記したが、その他に、遺物の実測、図面のレイアウトにおいて、神尾紀以子、熊谷信一両君の助力を得た。
9. 本報告書は、それ以前に出ている現地説明会資料に優先する。
10. 本横穴古墳出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

## 目 次

序 文	V. 出土品について ..... 22
目 次	1. 出土状況
I. 調査経過 ..... 1	2. 出土遺物
1. 調査に至る経過	VII. まとめと考察 ..... 24
2. 調査経過	1. 家型玄室の位置付け
3. 調査後の措置	2. 羨道と前庭について
II. 愛宕山装飾横穴の位置付け ..... 8	3. 出土した土師器坏から
1. 地理的環境	4. 装飾横穴の構造と文様
2. 歴史的環境	5. まとめ
III. 愛宕山装飾横穴の構造 ..... 15	参考・引用文献 ..... 31
1. 横穴の構造	付章、愛宕山装飾横穴出土の人骨 ..... 32
2. 玄門の閉塞	はじめに
IV. 装飾壁画について ..... 19	出土人骨の特徴
1. 壁画の概要	まとめ
2. 東北地方における横穴装飾	参考および引用文献

## 図 表 目 次

第1図 C地点1号墳仮保存施設図	5・6
第2図 愛宕山横穴古墳と周辺の遺跡	9
第3図 愛宕山横穴古墳群分布図	10
第4図 愛宕山横穴古墳群C地点地形図	12
第5図 C地点1号墳	13・14
第6図 C地点1号墳(装飾横穴古墳)玄室内削り痕状況	16
第7図 C地点1号墳玄門閉塞と羨道部堆積土状況	18
第8図 玄室奥壁壁画	19
第9図 上師器坏	22
第10図 刀子	22
第11図 A地点1号墳	27
第12図 A地点2号墳	28
表1. 羨道部堆積土註記表	17

## 写 真 目 次

写真 1	発掘調査区遺跡	1
写真 2	人骨の状況	2
写真 3	作業風景	3
写真 4	仮保存の状況(1)——玄門部	7
写真 5	仮保存の状況(2)——天井部	7
写真 6	羨道・玄門の状況	15
写真 7	羨道堆積土の状況	15
写真 8	玄室内より見る玄門の状況	17
写真 9	出土遺物(土師器と刀子)	23

## I. 調査経過

### 1. 調査に至る経過

昭和51年4月21日、午後4時頃、道路工事中に穴があき、中から人骨数体分を発見、また穴の中の壁面には彫刻のようなものがあるとの電話連絡が仙台南警察署からあった。

現場へ到着した時には、人骨は南警察署で全て運んでいた後であった。現場は仙台市向山四丁目にあって、昭和48年に調査した愛宕山横穴群B地点付近であり、前回調査の8号墳の西南20mほどに位置している。この付近は前回の調査時は民家もしくは道路になっていたところで、しかも前回調査の横穴よりも、発見された高さは2m前後低いようであった。

穴が確認されたのは午後2時半頃で、ブルドーザーによる削平工事中にボッカリ穴があいたという。穴は直径70~80cmで、横穴の玄室奥壁寄りの天井部が崩れたものとわかった。その時、内部に人骨があり、現場の工事担当者が警察に連絡、警察が現場検証のあと、古人骨の可能性もあると判断して、市教育委員会へ連絡したということである。

横穴は玄室の平面形がほぼ一辺1.8mの正方形、立面形は天井部崩落のためはっきりしなかったが、宮城県多賀城跡調査研究所長・氏家和典氏の鑑定では宝形造りであろうとのことであった。高さは約1.4mである。整正系ではない。奥壁には赤色顔料による文様があり、中央付近に $\oplus$ の文様がはっきり認められたほかは、直線と曲線の組み合わせのようであった。人骨は奥壁付近に数体分発見されたという。

午後4時40分頃に仙台市の社会教育課長、文化財係長、宮城県文化財保護課、東北大学歴学部の葉山助教授、仙台市文化財保護委員の伊東信雄先生に連絡。現場担当者には、とりあえず

写真1  
発掘調査区遠景 ▶





写真2

◆人骨の状況

工事を1日ストップするよう指示した。また係長を通して仙台市道路部の方へも連絡してもらった。

事後の処置としては、とりあえず内部を堆土し、内部の状況を確認し、記録をとり、調査後横穴を密閉して、関係者間で事後の対策を協議することにした。

## 2. 調査経過

協議の結果、仙台市道路部が伊東信雄仙台市文化財保護委員・東北学院大学教授に事前調査を委託することになり、昭和51年4月30日から6月12日まで調査を実施した。なお調査体制は次のとおりである。

調査期間 昭和51年4月30日～6月12日

調査主体 仙台市教育委員会、仙台市建設局道路部

調査担当者 伊東信雄

調査員（調査時）

仙台市教育委員会社会教育課文化財係

社会教育課長：東海林恒英（S51・5・1転出）、青木薫（S51・5・1転入）

＊ 主事：鈴木高文、岩瀬康治、朝倉秀之、田中則和、門間美郎（S51・5・1転出）

結城慎一（S51・5・1転入）

＊ 嘱託：大泉重治

調査参加者 柳田俊雄（東北大学考古学研究室研究生）、斎藤秀寿、川村正之、石黒伸一朗（東北学院大学々生）

調査協力 葉山杉夫（東北大学歴史学部助教授）

以下、調査経過を略記することとする。

- 4月26日（月） 1号墳前庭部、羨道部、玄門部の堆積土を排除、2号墳を検出する。  
4月28日（火） 1号墳横断、縦断セクション写真撮影、実測を開始する。  
5月1日（土） 1号墳羨道部堆積土左半分を堀り下げる。  
5月6日（木） 1号墳玄室内人骨出土状況および玄門閉塞状況写真撮影、玄門閉塞石平面実測、地形測量を行う。  
5月8日（土） 1号墳閉塞石を正面から実測する。  
5月10日（月） 1号墳閉塞石除去、最終写真撮影を実施する。  
5月11日（火） 1号墳平面図完了。  
5月12日（水） 1号墳縦断面および左側面図完了。  
5月13日（木） 1号墳右側面図完了。玄室横断面および奥壁立面の実測開始。  
5月14日（金） 1号墳奥壁実測、横断面実測。  
5月16日（土） 1号墳奥壁装飾展開図完了。1号墳前壁立面図完了。  
5月18日（火） 1号墳玄門部、羨道部の正面、断面を実測。  
5月21日（金） 報道機関に成果発表。  
5月22日（土） 現地説明会を開く。

### 3. 調査後の措置

発見箇所は今のところ歩道、車道に囲まれた三角地として残っており、次の三つの方策により仮保存した。

写真3  
作業風景 ▶

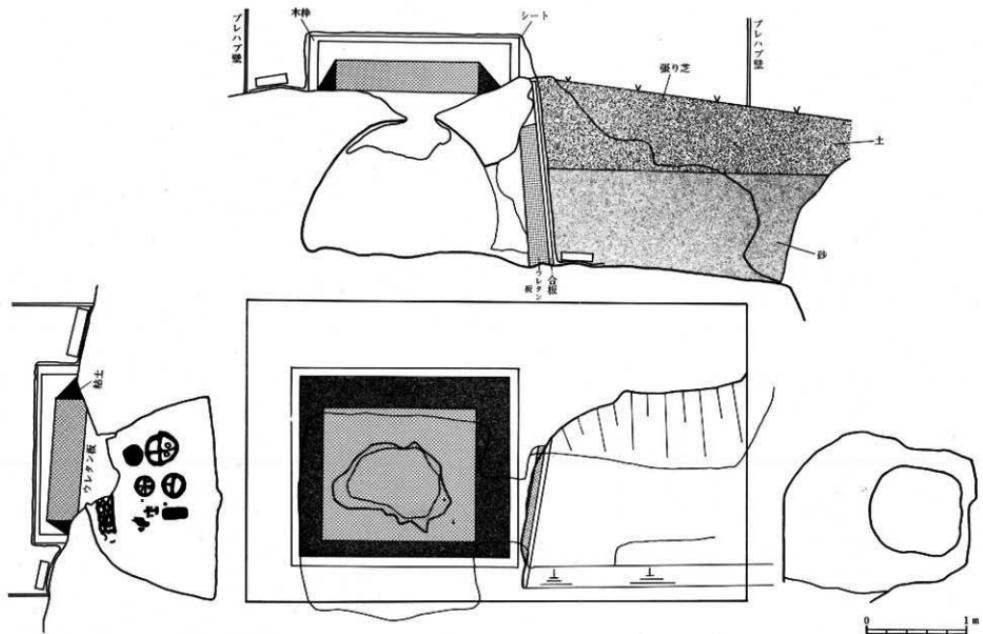


1. 三角地に木杭、有刺鉄線による柵を設ける。
2. 横穴を覆う假設小屋を設置する。
3. 古墳開口部の閉鎖を行う。

その後、文化庁記念物課の阿部義平技官、高瀬要・技官らのアドバイスを受けているが、現在、仙台市としては、この横穴の今後の措置を決定してはいない。問題点をまとめてみると以下のようになる。

1. 価値は認められるが、道路の近くにあり、崩壊の危険がある。将来の都市計画街路のルート上にある。昭和53年の宮城県沖地震による被害を受けている可能性がある。以上のことがら国の指定は非常にむずかしく、したがって国庫補助もむずかしい。
2. 仙台市の文化財保護委員会、宮城県教育委員会と相談して、対策を考える方がよい。
3. 地震による被害をも含めて、再度内部の状況を調査する必要がある。
4. 完全に保存する場合には、福島県の羽山装飾横穴の方式をとったら良いのではないか。
5. 一つの方法としては、奥壁の装飾部分を樹脂等でかため、その部分を切り取って、他所に移設保存することも考えられる。

以上のような様々な問題等はあるが、装飾横穴の現状を再調査して、早急に対応しなければならない時期にきているようである。この場合、再開してから対応を協議するのでは装飾壁画そのものに与える影響が大きいので、①昭和51年の調査時とほぼ同程度の現状であった場合、②装飾部分が退色して見えなくなっている場合、③道路の震動や地震によって、全体的に大小の剥落を受けている場合の対応策をあらかじめ協議しておき、再調査と同時に決定していた対応策がどれなければ意味がなく、マイナスの結果を生じることになる。



第1図 C地点1号墳保存施設図

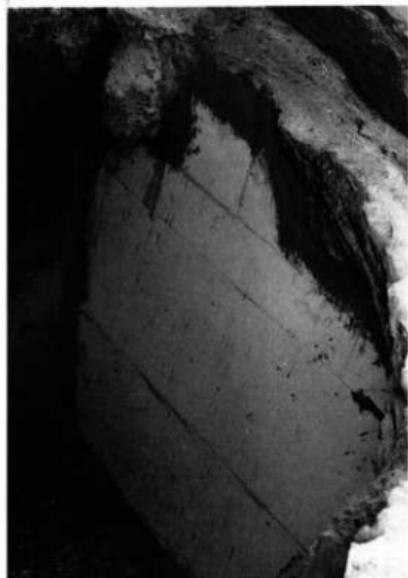


写真4

◀ 仮保存の状況(1)

——玄門部

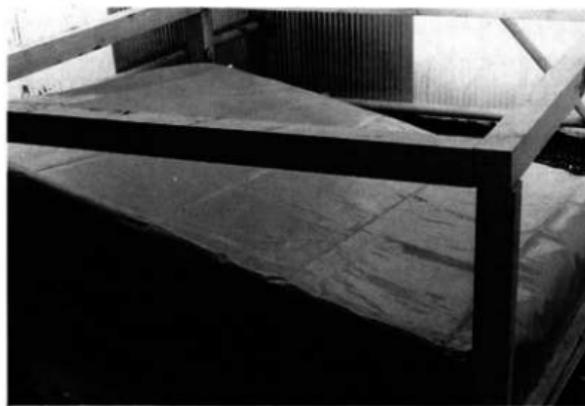


写真5

◀ 仮保存の状況(2)

——天井部

## II. 愛宕山装飾横穴の位置付け

### 1. 地理的環境

仙台市は、東京の北約350km、宮城県のほぼ中央に位置しており、西側の奥羽山脈から続く第3紀の丘陵の東端、仙台平野の西縁に市街地が展開している。1985年現在の市の面積は、約237km<sup>2</sup>で、人口は約70万人である。仙台平野は西を奥羽山脈、東を太平洋、北を北上山地、南を阿武隈山地に囲まれて、その中心になる仙台市勾当台通りの宮城県庁前は、北緯38度15分54秒、東経140度52分26秒である。

仙台市は、北、西、南を囲んでいる丘陵地帯と、主として市街地となっている段丘地帯、その東側に続く沖積平野からなっている。市内の地形をみると、北は台原から南は青葉山の下まで階段状になっているが、広瀬川によって形成された段丘で、上位から下位まで、台原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘の四つの段丘に分けることができる。

沖積平野は第4紀の表層、浅層、中間層、第3紀の深層の4層からなっている。表層は沖積世後期の陸上堆積層である深沼層、霞ノ目層、福田町層に細分される。浅層は沖積世前期の海底堆積層である岩切層、中間層は洪積世後期の蒲生層に該当する。また深層は鮮新世の竜ノ口層、亀岡層、三滝層に分類されている。以上の4層構造は仙台平野全般に共通して見られる。

さて愛宕山装飾横穴は、仙台駅の南方約2km、標高が20m前後の仙台市向山四丁目97—5地内にある。横穴のある位置のすぐ東側を北西から南東方向に広瀬川が流れている。これに平行するように愛宕山と大年寺山が張り出しており、これに挟まれる沢が、この装飾横穴が存在する傾斜地となっている。愛宕山の北傾面には愛宕山横穴A地点、南傾面には愛宕山横穴B、C地点、大年寺山の北斜面には大年寺横穴がある。現在この沢は多量の土砂に埋ったり、人為的に埋められたりして、市道及び住宅地となっている。

地質的に見れば、横穴付近では地表から厚さ1~2mの黄色火山灰層、段丘疊層があり、その下に基盤岩層が堆積している。基盤岩層の最上層は、第3紀鮮新世末期の大年寺層（軟質の青灰色もしくは灰黄色凝灰質シルト岩ないし砂岩=絶対年代B、P100~200万年）であり、その下には八木山層（細粒凝灰岩、軽石質凝灰岩が主で、中に厚さ1m前後の帆岩層を含む）が位置する。この大年寺層、八木山層とも河川ないし浅海性の堆積層で、層中に多量の貝や木葉の化石等を含んでいる。

愛宕山装飾横穴は上記の大年寺層に構築されている。この大年寺層には隨所にクラックがあり、かつ下層の八木山層が不透水層であるため、涌水も多い。



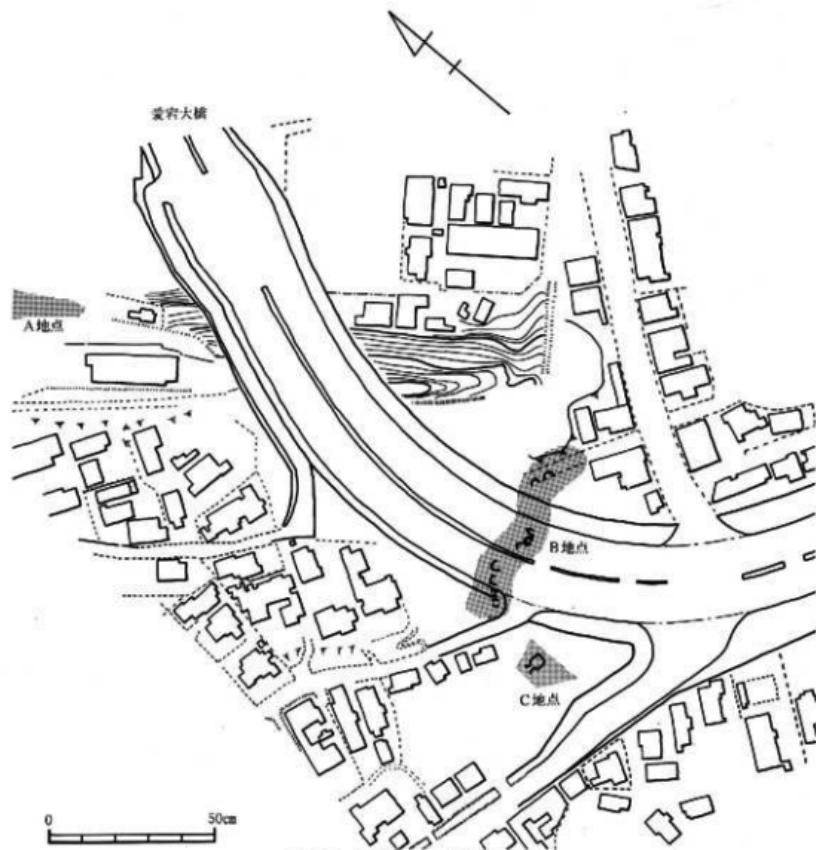
第2図 愛宕山横穴古墳と周辺の遺跡

## 2. 歴史的環境

仙台市内の遺跡は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代などと絶えることがなく続く。前期・後期旧石器を出土した山田上ノ台遺跡、北前遺跡、縄文時代の大集落跡である山田上ノ台遺跡、三神峯遺跡、人来田遺跡、上野遺跡はいずれも名取川の北岸に点在する。

仙台市内には広瀬川と名取川という両河川に挟まれる青葉山丘陵（愛宕山も大年寺山も青葉山丘陵から派生する一丘の先端である。）、七北田川の南北に平行して横たわる台原・小田原丘陵、七北田丘陵があり、いずれも古代からの生活の舞台となっている。

概観すれば、青葉山丘陵周辺には旧石器、縄文、古墳時代から仙台城まで歴史的に幅広い遺跡の分布が見られる。台原・小田原丘陵は古代商業地帯として知られ、七北田丘陵は岩切城な



第3図 愛宕山横穴古墳群分布図

どの中世の遺跡と横穴古墳群が点在している。愛宕山袋飾横山は青葉山丘陵の東端に位置していると言える。

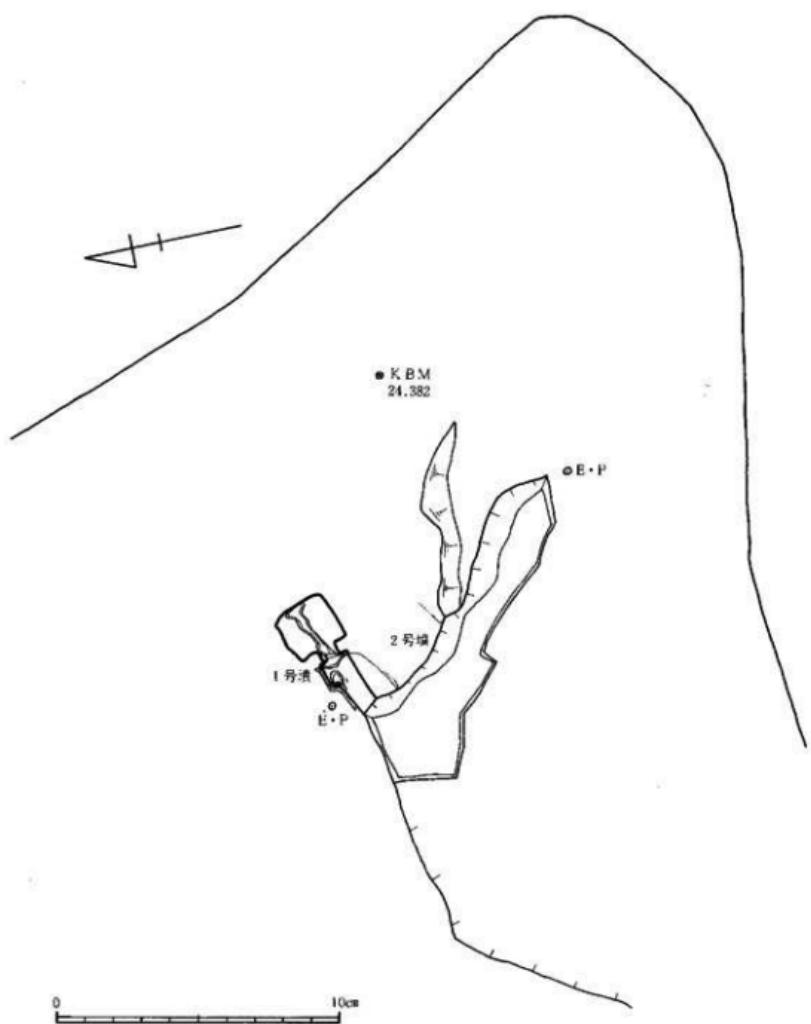
次に特に古墳、横穴の遺跡について概説しておく。

仙台市内における横穴群の分布は、岩切地区(七北田丘陵)、向山、西多賀地区(青葉山丘陵)に集中し、市指定の善応寺横穴群は例外的に燕沢地区(台原・小田原丘陵)に存在する。これらのほとんどは、丘陵の東端部の複雑に入りこんだ渓谷地形もしくは埋積谷の中腹に位置している。

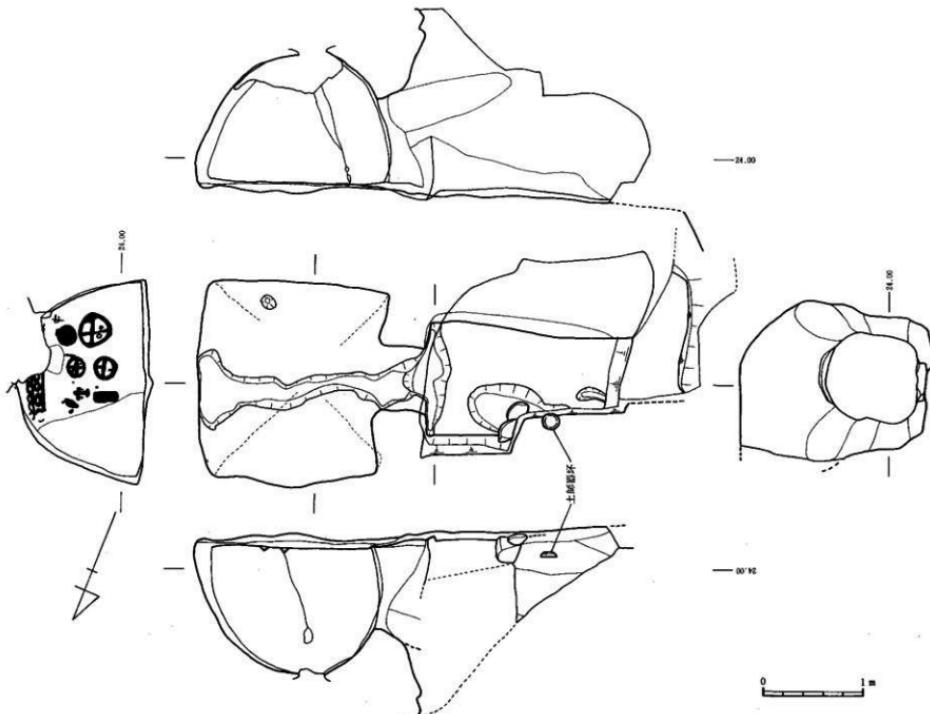
各横穴群の前方に開けた平地部分には高塚古墳の分布が認められる。向山地区の近辺に所在する古墳としては、兜塚古墳(5世紀後半・帆立貝式前方後円墳・軸長53m)、裏町古墳(5世紀後半・前方後円墳・軸長40m)、遠見塚古墳(5世紀初頭・前方後円墳・軸長110m)、法領塚古墳(7世紀・円墳・径32m)などがある。かつては一塚、二塚古墳なども存在していた。

横穴群の分布は大小の河川の近辺であることが多いが、これらの河川の自然堤防上などには横穴群形成の基盤である古代の集落跡の成立が見られる。向山地区近辺の集落遺跡として顕著なものは、弥生~平安時代の大集落跡である南小泉遺跡があげられる。南小泉遺跡は向山地区とは広瀬川を挟んで東側に広く把握されており、その中には前述の遠見塚古墳、法領塚古墳も造営されている。また、近年明らかになりつつある郡山遺跡との関係も重視すべきであろう。

愛宕山横穴群は仙台市向山と越路にかけて所在する。そのうち愛宕山の北斜面、広瀬川沿いに点在する地点をA地点、南斜面に存在する地区をB地点、そして今回報告する部分をC地点に分ける。この周囲には大年寺横穴群、宗禅寺横穴群があり、総体して「向山横穴群」と呼ばれることもある。この横穴については、昭和13年、清水東四郎が「仙台市向山の横穴」(宮城県史跡名勝天然記念物調査報告12)として紹介しており、戦前から周知の横穴群である。



第4図 愛宕山横穴古墳C地点地形図



第5図 C地点1号墳

### III. 愛宕山装飾横穴の構造

#### 1. 横穴の構造

本横穴は羨道、玄門、玄室の各部からなり、中心軸長は4.9mである。羨道部端で急に落ち込んでいるので、沢の凝灰岩の斜面に2号墳と共に築造されたものと観察されるが、前庭部の在り方は不明である。主軸はN68°Eで、南西向きに開口するものである。

（玄室） 平面形は奥壁幅約1.9m、前壁幅約1.8m、右壁奥行約1.8m、左壁奥行1.65mと、ほぼ正方形と言えるが、奥壁、前壁とも、それぞれ約20cm、10cmと奥の方へふくらんでいる。

立面形は宝形であるが、床面から四方の壁が直立せず内傾しているので、一見してドーム形にも見える。高さは約1.4mである。

床面はほぼ平坦であり、中軸線に沿うように排水溝が施設されている。排水溝はかなり崩れしており、上幅が18cmから33cmほどで、特に奥壁のところで幅80cmと左右に広がっている。深さも奥壁の部分が約4cm、中央部が8cmと深くなってしまっており、他は2~3cmである。

玄室内壁上半分には、四面にいずれもノミによる整形痕が見られる。ノミ痕幅は5~10cmで、天井部頂点から放射状に施されている。床面近くには、ピッケル状の荒削り痕が見られる。



▲写真6 羨道、玄門の状況



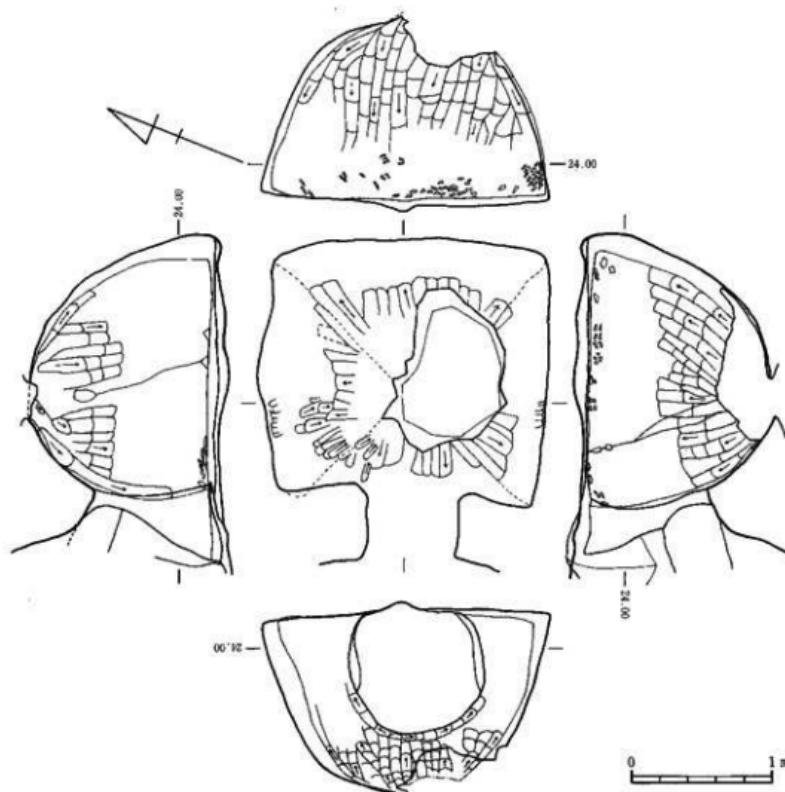
▲写真7 羨道堆積土の状況

〈玄門〉 崩落により玄門上部が丸くなり、確定できないが、その形態はアーチ形と思われる。高さは現状では約90cm、幅は60~90cmを計る。奥行は約55cmである。

溝は玄室から続いているが幅約35cmと広く、左壁から右壁へと斜めに横切っている。ノミ痕は崩落してその痕跡をとどめていない。

玄門前壁床面には、これも崩壊しているが、上幅10~20cm（中央部では崩れて約45cmになっている）、深さ約6cmの閉塞溝が施設されている。

〈隧道〉 長さ約2.5m、上幅は崩壊のため計測不能、床面幅は約1.15mである。左壁前方は一部未掘で不明である。床面は前方に若干傾斜しており、その傾斜角度は約5度である。それが隧道部前端から約62度の角度で急に落ち込んでいる。



第6図 C地点1号墳（装飾横穴古墳）玄室内削り痕状況

## 2. 玄門の閉塞

玄門前面の羨道床面上に閉塞用の河原石が高さ70~80cmに積み重なっている。それらの石はほとんど玄門部内に崩落していっていない。

この閉塞石と、玄門前面の閉塞溝で板状のものをおさえるようにして玄門を閉塞したものであろう。

閉塞溝と対応するように玄門前面両側壁にはカンヌキ用と思われる穴が一、二対施設されている場合があるが、羨道部左右側壁が大きく崩落しているため不明である。

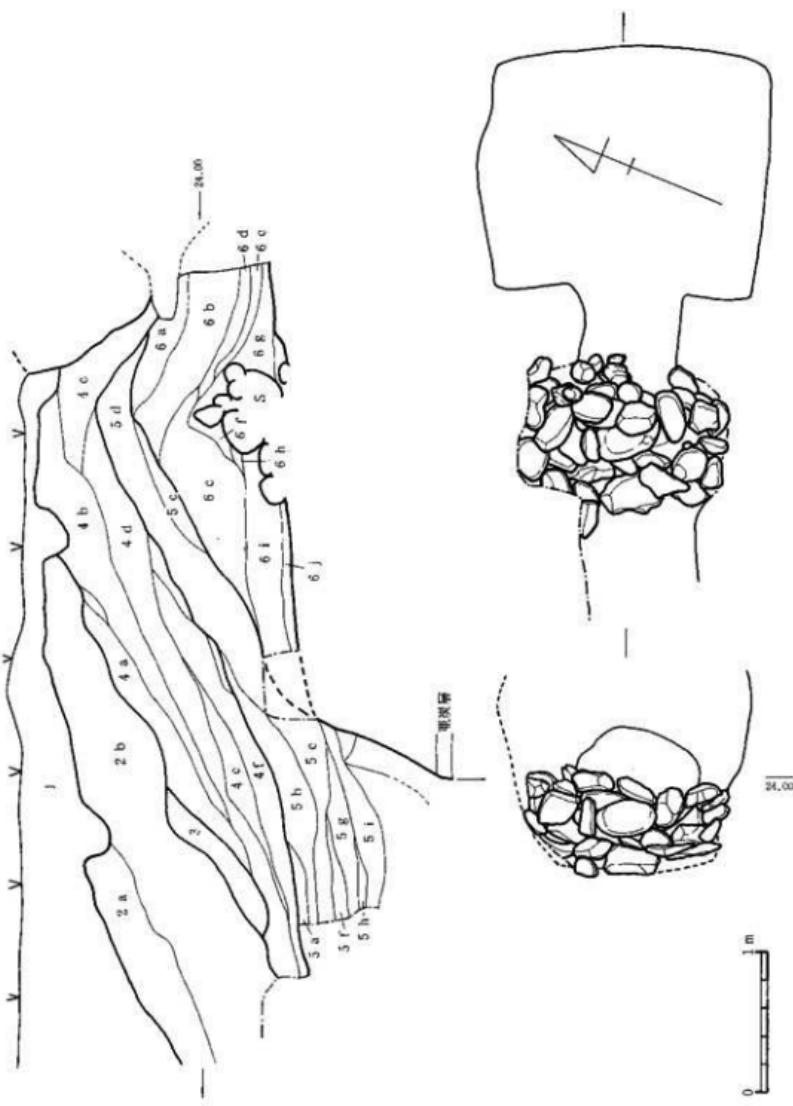


写真8

◀ 玄室内より見る  
玄門の状況

表1 羨道堆積土註記表

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	黒褐色	シルト	新しい盛土。	5 f	黒褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。灰色土をブロック状に含む。
2 a	暗黄褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。	5 g	褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。
2 b	暗褐色	シルト	礫含む。しまりあり。	5 h	灰褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。
3	黒色	シルト	黒褐色土をブロック状に少し含む。	5 i	赤褐色	シルト	ブロック状に灰色土含む。
4 a	黑色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む。礫含む。	6 a	黃褐色	シルト	ブロック状に灰色土含む。
4 b	黄褐色	シルト	礫を多量に含み、もろい。	6 b	灰褐色	シルト	鈍状岩崩落土。きめ細いが、もろい。
4 c	黒褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む。礫含む。	6 c	黄白色	シルト	鈍状岩崩落土。きめ細く、しまりなし。
4 d	黒褐色	シルト	礫を多量に含み、もろい。	6 d	灰色	シルト	きめ細いが、もろい。
4 e	黑色	シルト	固くしまっている。	6 e	灰褐色	シルト	
4 f	黒褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む。礫含む。	6 f	黄褐色	シルト	きめ細いが、もろい。
5 a	黒色	シルト	きめ細く、しまりあり。	6 g	黄白色	シルト	褐色土をブロック状に含む。
5 b	暗褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。礫を含む。	6 h	白色	シルト	
5 c	黄褐色	シルト	礫含み、もろい。	6 i	黄褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。
5 d	黒褐色	シルト	固くしまっている。	6 j	黄白色	シルト	きめ細く、しまりあり。
5 e	暗褐色	シルト	きめ細く、しまりあり。礫を少量含む。				



第7図 C地点1号墳玄門閉塞と羨道部堆積土状況

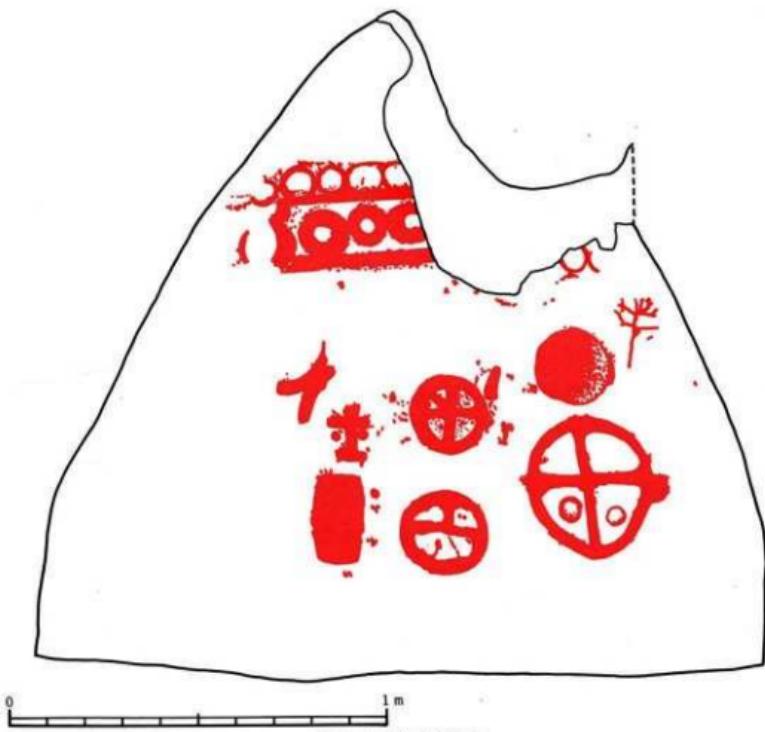
## IV. 装飾壁画について

### 1. 壁画の概要

当横穴の装飾は玄室奥壁に見られる。壁面の剥落及び退色によって全般的に不鮮明で、必ずしも全体的な文様構成はわからない。彩色はすべて赤色顔料で、顔料はベンガラと考えられる。奥壁は床面から3分の2ほどの高さで文様形態が変わる。上部3分の1を上位文様群、下部3分の2を下位文様群として、次にその詳細な説明を行なう。

#### ●上位文様群

横穴形態から見れば宝形の玄室で、奥壁も直立しておらず、内側に傾斜していることから、ちょうど軒線から天井部にかけて施文されているとも見られる。



第8図 玄室奥壁壁画

3本の平行線の間に円文が水平方に2段になって配置されている。天井部崩落のため右半分は不明である。

3本の平行線のうち、下のものの長さは40cm、太さは4cm、中のものは長さ36cm、太さ2cm、上のものが長さ17cm、太さ1cmほどである。下段の円文は太さ3~3.5cmで、径10~13cmに描かれている。はっきりしているのは3個で、一番左端にあるものも円文と思われるが、サイズも大きくなり、平行線内におさまっていないよう、剥落も多く不明確である。上段の円文は太さ1~1.5cm、径8~10cmに描かれている。はっきり残っているのは4個で、左端のものは円文になるようだが、これも下段と同様に平行線内から若干はみ出るように施文されている。

文様の配列は正確に言えば水平ではなく、ゆるく左下がりになっており、本来は弧を描くようになっていたと思われる。また奥壁右に崩落がまぬがれたところが若干あるが、上段の円文と同じ位のものが、下段の位置に2個ほど見られる。しかし、ここでは平行線にあたるものは見られない。

#### ●下位文様群

下位文様群は上位文様群のような規則的な配置になっておらず、また天井部崩落の影響もないが、奥壁約左半分が剥落、退色のため不明瞭な部分が多い。やはり円文が主体だと言えると思われるが、九十字文とでも言うべきものか、円内を十字に区切るもの、円内が全面に赤彩されているものなどがある。

円及び十字を描いている線の太さは2.5cm~3.5cmを計る。円の大きさは、大きいものが径33~38cm、小さいものが径20cmである。

また円文を基調とする文様構成からはずれるものが右上に描かれている。樹枝状の文様に見えるがはっきりしない。

以上記してきたように、円を基調とした文様であるが、円に十字の文様は他に例がなく、この横穴特有のものといえよう。また剥落、退色してはっきりしないが、上位及び下位文様群に、2~4cm径の珠文が任意に配置されているようにも観察できる。文様を縁どる線刻は施されていない。

## 2. 東北地方における横穴装飾

東北地方の横穴の発見は、現在のところ福島、宮城両県で、宮城県北を北限としている。よって装飾横穴の存在も、福島、宮城両県である。

宮城県志田郡三本木町 山畠横穴群

◆ ◆ 松山町 亀井園横穴群

◆ ◆ 鹿島台町 大迫高岩横穴群

◆ 玉造郡岩出山町 川北横穴群

宮城県遠田郡涌谷町	追戸横穴群
・ 桃生郡矢本町	矢本横穴群
・ 仙台市	愛宕山横穴群
福島県西白河郡泉崎村	泉崎横穴群
・ 東村	大久保横穴群
・ いわき市	中田横穴群
・	館山横穴群
・ 双葉郡双葉町	清戸迫横穴群
・ 原町市	羽山横穴群
・ 相馬郡鹿島町	大窪横穴群
・ 小高町	浪岡横穴群

宮城県、福島県の横穴の装飾を比較すると、福島県のそれの方が華やかである。福島県で発見されたものは、国指定史跡である泉崎横穴、中田横穴、清戸迫横穴、羽山横穴を中心にして、連続三角文など幾何学図文、人物、動物、狩猟の様子を表わした形象図文がある。宮城県の例は、装飾とはっきり言えるものは、山畠横穴10、15号墳、高岩横穴18号墳、愛宕山横穴C地点1号墳の円文、珠文を主体としたものである。亀井圓横穴群中にも、珠文をもつ横穴が発見されたというが、正式な発表がないので、ここではふれることにする。矢本横穴第28号墳も線刻であるが、円文である。

大窪横穴10号墳、大久保横穴、山畠横穴6号墳、亀井圓横穴3、4号墳、川北横穴、追戸横穴A地区2号墳は、その玄室及び羨道に赤色顔料で梁、棟や柱が描かれている。これら格子目文は家屋の骨組構造を描写したものと思われ、形象図文の一種と見られなくもない。

しかしながら、玄室及び羨道が赤色や黄色に全面塗られていると思われるものもあり、また整然としたノミ痕を装飾と解せないこともなくなるので、格子目文をも装飾横穴として扱えられるのか、今後検討を要する問題点である。

順序が逆になったが、館山横穴は渦巻文と馬の線刻があり、高岩横穴18号墳には珠文のほかに、舟の線刻と思われるものが発見されていることを記しておく。また、今回発見された愛宕山横穴C地点1号墳の文様を円文、珠文を主体とするグループの中においたが、円が太い直線によって区切られた中に配置され、また円が、他のもののように同じ円を描くものではなく、円内を十字に区切るように施文されている点など、現在まで東北地方で発見された中にその類例を見い出すことはできない。

## V. 出土品について

### 1. 出土状況

出土品は土師器壺1点、刀子1点、人骨5体分である。そのほか、若干の須恵器、土師器、鉄製品の細片及び骨片が出土している。

土師器壺は狭道部左壁沿い、床面から約30cmほど上がった位置に据え置かれた状態で発見された。その上に狭道部側壁が崩落して堆積している状況である。刀子は玄室ほぼ中央床面から出土している。また人骨は調査時に既に動かされていたものだが、ほとんどが玄室奥壁寄り床面上から発見されたものである。

### 2. 出土遺物

#### ●土師器壺(第9図)

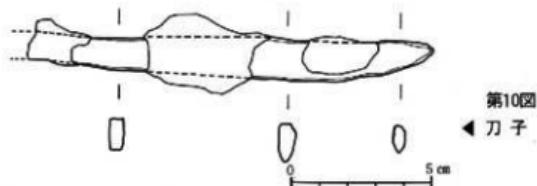
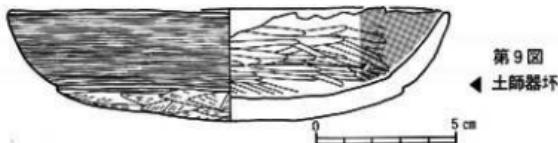
口径15.7cm、器高4.3cmの丸底の壺で、底部最下点から1.6cmの位置に段を有する。底部から口縁部まで、全体的にまる味をそなえながら内弯して立て上がっていっている。

内面は黒色処理されており、ヘラミガキされている。外面は底部がヘラケズリ、その上の口縁部は横位のナデ調整痕が観察できる。

色調は内面が黒色、外面が褐色を呈しており、また胎土には若干の砂粒を含み、焼成は良好である。

#### ●刀子(第10図)

全長14.5cm(身長9.6cm、茎長4.2cm、関長0.7cm)であり、平造である。関は棟の方に刻込みがある棟関である。棟は平棟で、棟の幅(厚さ)は身中央で0.3cmを計る。身幅、茎幅はその中央部で、それぞれ1.5cm、1.1cmである。



### ●人骨

人骨については鑑定がおくれていたが、東北大学医学部第一解剖学教室の山田格先生のご紹介で、獨協医科大学第一解剖学教室の馬場悠先生に依頼することになり、昭和58年10月27日、研究依頼・引受についての覚書を交換した。

鑑定の結果、5体分の人骨が確認され、それから推定されるところによれば、子供から大人のものがあり、男性と女性のものであることがわかった。

鑑定結果の詳細は、刊末に付章として掲載したので参照されたい。

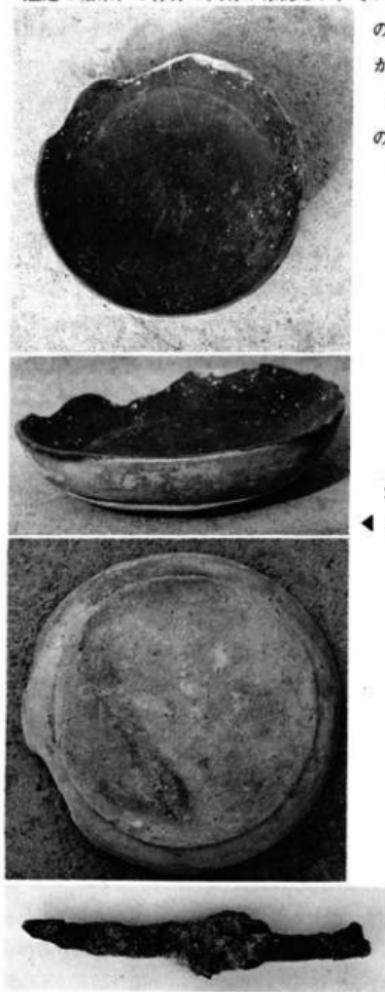


写真9

◀ 出土遺物（土師器と刀子）

## VII. まとめと考察

### 1. 家型玄室の位置付け

当横穴の玄室は、両袖式の家型で、棺座を有しないものであり、このタイプは東北地方において一般的なものと理解できる。家型はそれを細分すれば、切妻造り、寄棟造り、宝形造りなどと分けられる。立面形から言えば、ドーム型→家型（宝形→寄棟→切妻）→アーチ型と、その変遷を大雑把にまとめることができる。

ところで横穴は1基だけで存在するものではなく、少なくとも数基と群をなしている。家型を呈するものは、ドーム型の発生に次いで古いものと一般に考えられているところであるが、現実に存在するそれが、その中でも古く位置付けられるものか、また系統を引くものとして把握されるべきものなのかという問題がある。よって家型の横穴が存在していない横穴群を、その玄室の形状からのみ時期を推定することはむずかしく、間違いも多い。

しかしながら、家型横穴が存在している横穴群を概観すると、全基が家型を呈するものではなく、その一部にそれが認められる。もっとも、宮城県亘理町の塙の内横穴群、雁田横穴群、宮城県鹿島台町の八ツ穴横穴群、高岩横穴群の場合は、玄室立面形が家型を呈するものが半数前後存在しており、例外的な横穴群と言える。これは、ドーム型から家型、アーチ型のものへという造営時期を示す場合と、同群内で同一兆域をもつものについては、その被葬者の身分的位置付けを反映しているものであろう。

今まで玄室の立面形から述べてきたが、平面形から言うと、当地方では、ほぼ正方形から長方形へ、そして、それらの変形である橢円形並びに扇形へという形態の流れが考えられている。当横穴の場合は若干不整形ながら、ほぼ正方形を呈しており、立面形が宝形なのと同様に古い形態を呈しているといえる。

ところで今回発見された宝形造りの玄室をもつこの横穴は、その壁が内傾して、一見、ドーム型にも見える形態を呈しており、ドーム型のものにも、四隅に四つの壁を区画する線が立ちあがっているものが多く、古い系統を引いたものと見た方が妥当であり、また愛宕山横穴群中で現在知られている家型の横穴がこれ1基であること、装飾があることを考慮すれば、同群中では身分的に高い被葬者であったと推定される。

### 2. 羨道と前庭について

本報告では「羨道」という名称を使用したが、はたして、当横穴において「羨道」と呼称したことが妥当であったかどうか、若干検討してみたい。「東北横穴の問題」(氏家・1974)によれば、東北地方の横穴の基本形は両袖式で、玄室、玄門、羨道、羨門、前庭の各部分から構成されている。

当横穴は、愛宕山横穴C地点1号墳であり、未掘の2号墳が南隣りに存在していることがわかっている。また昭和48年に調査したB地点の第8号横穴は、当1号墳の東北約20mで、玄室床面レベルで約2m高いところに位置している。立地面から見ると、C地点からB地点までは緩斜面で、B地点北側は愛宕山と呼ばれ、急な斜面となっている。もちろんC、B地点間は、私道であったり宅地になっているところも多く、B地点横穴調査の結果から見ても、かなり崩落したり、削平されたことがわかる。これは、CとB地点の関係が、我々がB、C地点と呼称しているようにグループの相違ではなく、両地区一体となって三段状（B地点は一段築に横穴が配置されている。）の横穴配置になっていたものとも推定できる。

さて、II-1の地理的環境のところで、当横穴の位置が大年寺山と愛宕山の間に位置するということを記したが、大年寺山北面が急な崖面となっており、愛宕山の南面が比較的緩斜面を形成している。これは、向山から広瀬川に流れる沢が、愛宕山寄りから大年寺山寄りに流れをかえ、深く地山（斜面）を浸食していったためと理解できる。

ところで、「渓道」という認識は、「玄室」同様、天井を有しており、渓門で第一次的に閉塞され、追跡時に玄門を閉塞したものという解釈にたっている。

当C地点1号墳は、渓道部天井が崩落しているのか、現状では存在してなく、渓道と前庭の境をなす渓門も、床に若干の落差を有するものでなく、調査で確認しただけでも90cm以上、急に落ち込んでいる。これを現状だけから解釈すれば、「渓道」とした部分が「前庭」ということになり、その前面が沢で急な崖面となっていると言える。

しかしながら、当報告において、あえて「渓道」と呼称したのは、当横穴が①軟質の大年寺層に築造され、沢水等による浸食がはげしく行なわれたと思われること、②現実にB、C地点間に削平を受け、B地点の横穴が玄室すらも保存状態が悪いこと、③もし「渓道」でなかったと仮定し、沢水による浸食がそれほどでないと仮定した場合、築造当時、横穴前面が既に急な崖面であり、沢水がその下を流れていることになり、遺骸搬入等の作業が困難であると考えられるだけでなく、横穴築造の足場確保がむずかしい場所を選地したことになり、このことは考えにくい、④「渓道」とした部分に天井部崩落上と見られる堆積があるからである。

よって当横穴は、玄室、玄門、渓道、渓門、前庭の基本形を一応整えていたものが、渓道部天井及び側壁の崩落及び沢水等による浸食によって、渓門から前庭部が浸食されたものと理解したものである。

### 3. 出土した土師器坏から

渓道から1点の丸底の土師器坏が出土した。内黒で、内外面に段を有する。段は外面に比して内面のものは目だたなく、消滅直前の様相である。内面の調整は横位のヘラミガキ、外面は、段以下の底部が手持ちのヘラケズリ、段から上の口縁部は横位のナデ調整である。口縁部は、

やや内寄して立ち上がっている。ロクロは使用されていない。

この形体、調査技法をもつ土師器坏は、東北地方南半の土師器編年によれば栗団式第Ⅱ類に該当し、年代的には7世紀後半に位置付けられよう。

さて、この出土土師器坏は、この1号墳築造年代と一致するであろうか。出土状況は、狭道部左側壁沿いで、床面上約30cmの位置である。床面上ではないが、掘え置かれたような存り方であった。向山横穴群中、今まで調査されたところは、愛宕山横穴B地点と、宗禅寺横穴である。宗禅寺横穴の土師器坏は、栗団式第Ⅱ類から国分寺下層式にかけてのものであり、愛宕山横穴B地点は遺物が少なく、比較する土師器坏が出土していない。玄室の形態から見ると、愛宕山横穴C地点1号墳が家型の宝形造りで、宗禅寺横穴の家型のものは、切妻造りである。これは宝形→切妻という一般的な変遷を想起させる。また、C地点1号墳が玄門閉塞されていた状況、玄室奥壁寄りに5体分ほどの人骨があったことなど、追葬があったことを推測させる資料と考えられる。

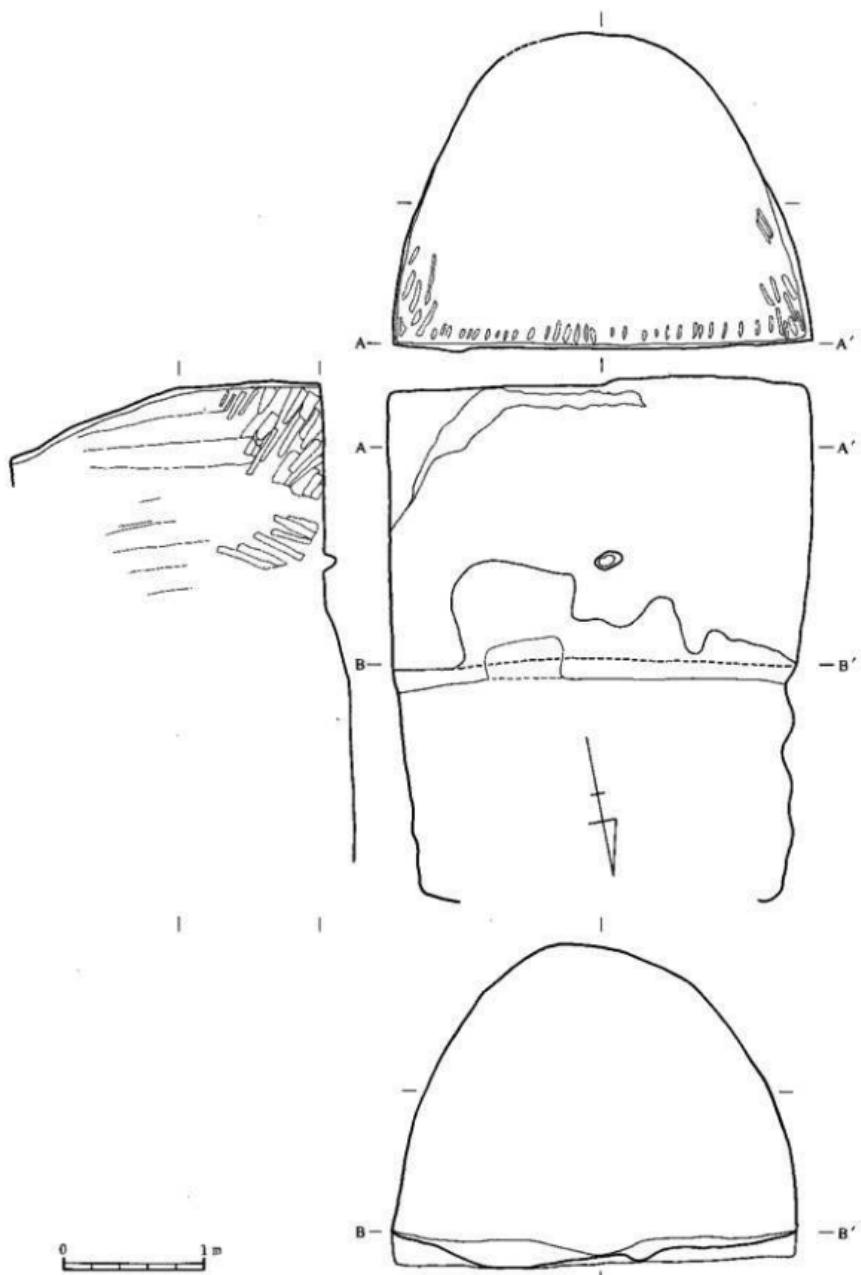
以上のことから、ここで発見された栗団式第Ⅱ類の土師器坏は、築造当時の遺物ではなく、追葬時の遺物と推定するのが妥当と思われる。このことから1号墳の築造時期は、7世紀中葉頃に考えても差しつかえないものと思う。

ところで、愛宕山横穴を含めて、向山横穴群と関連する居住地域はどこであろうか。この位置から見て、また出土遺物から見て、関連しそうな遺跡は南小泉遺跡と郡山遺跡が考えられる。南小泉遺跡は広瀬川を越えて、約3km東側にあり、また郡山遺跡は、広瀬川を東側に越えずに、川岸に沿って2kmほど南東にくだったところにある。このことを考えると、横穴との関連は郡山地区の方が強いようにも考えられる。郡山遺跡は寺院跡、官衙跡として把えられており、勾玉、平瓶など横穴出土の遺物と類似するものも出土している。現在考えられている年代は、7世紀後半から8世紀初頭である。またこの遺跡からは、関東系、関西系の土師器も出土しているので、向山横穴群からも、それが1点でも出土すれば、このことが実証されることになると思う。

#### 4. 装飾横穴の構造と文様

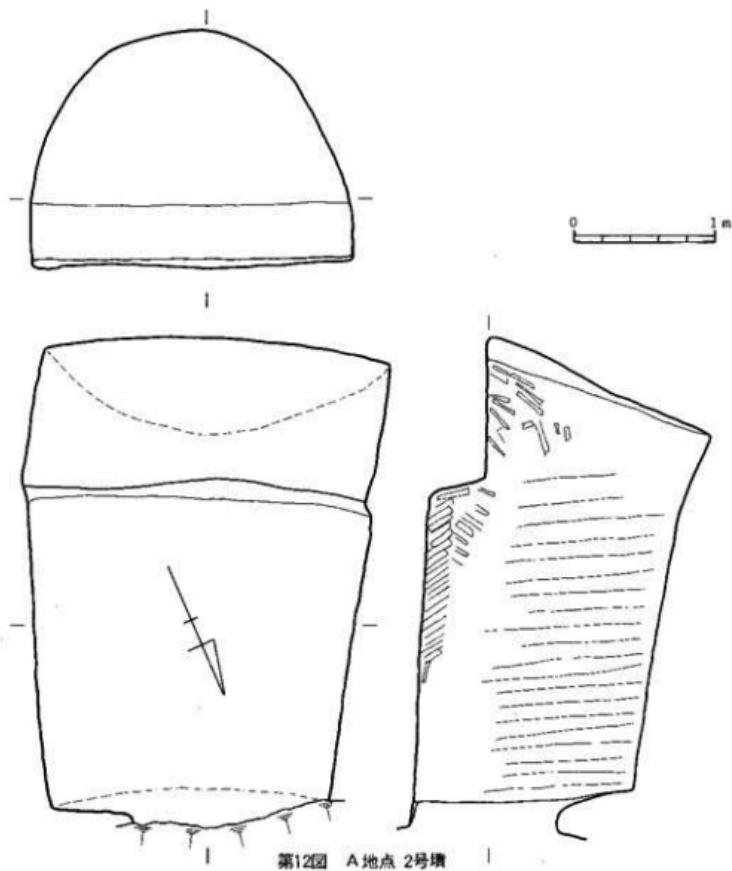
「装飾文のある横穴の形式・構造は……群中の一般的な形態と異なる特殊な構造で、丁寧に仕上げられ、しかも数が限られた整正系有台床等の特殊な形態をもっている」(梅宮・1976)とまとめられている。

さて、愛宕山装飾横穴で検討した場合、「群中の一般的な形態と異なる特殊な構造」と言えるだろうか。愛宕山横穴A地点は、未調査であるが開口しているものが多く、それを見るとアーチ型の玄室である。同B地点は一部調査したが、これもアーチ型である。大年寺山横穴も未調査であるが、一部開口しているものを見ると、アーチ型を呈している。宗禅寺横穴は、ドー



第11図 A地点 1号填

ム型、アーチ型と家型切妻造りのものである。これら向山横穴群を構成する三つの横穴において、現在発見されている中で、唯一例、宝形造りの玄室をもつのが、この愛宕山横穴C地区1号墳であり、そういう意味においては、たしかに「群中においては特殊な構造」をもつものと言えるだろう。ただし、この「特殊な構造」をもつ横穴が、かならずしも装飾をもつ横穴でないことは周知のことと思う。仙台市内には宝形を呈する横穴は、この愛宕山横穴のほかに、善應寺横穴に1基と入生沢横穴に1基あり、いずれも装飾横穴ではない。これは、装飾の有無は構造の「特殊性」として把握されても、構造の「特殊性」は群中における被葬者の「身分的上下関係」を反映するものと考えられるからであろう。



第12図 A地点 2号墳

「整正系有台床等の特殊な形態をもつ」というのはどうか。これが今まで発見された装飾横穴に言えたことであり、愛宕山横穴の場合は、この概念からはずれるものである。それでは愛宕山横穴の場合は、例外的な存在として位置付けられるのだろうか。台床（以下、「棺座」と使用する。）を有する横穴は宮城県内においては数多く、特に有縁棺座、クリヌキ棺座など、棺座が一般的に発達した形態を示すのは、ほぼ阿武隈山地から北、宮城県岩沼市付近から以北である。このあたりは、ちょうど、福島県浜通り地方と中通り地方の文化が交差する地域と見られている。このことは、宮城県内においては、有棺座の横穴は一般的なものであり、この点では福島県の横穴の場合と異なることを指摘する。棺座が福島県から宮城県にきて発達したということは、福島県で棺座が流行した時期、宮城県においては、きほど棺座の流行がなく、無棺座の横穴もかなりあったと考えられるし、そのような時期に「装飾」も入ってきたと考えるならば、宮城県内、特に仙台以南の地域においては、今後、無棺座の装飾横穴の発見がなされると推定される。このように考えてみると、愛宕山横穴の場合は特殊な存在ではなく、宮城県内における装飾横穴の一つの存り方として考えられるであろう。

次に文様についてであるが、愛宕山横穴の装飾は、前項で円文を主体としたものとして見え、上位と下位文様群として取り扱ってきた。

上位文様群は、2本の直線の間に円文を配したものであるが、このような文様配置は、福島県の中田横穴にその類例をもとめられるのではないだろうか。もちろん中田横穴の場合は、円文ではなく、直線間に三角文を配している点で愛宕山横穴のものとは異なるが、直線とそれに挿まれた連続文という点で、意匠の共通性を感じさせる。

また下位文様群については、福島県羽山横穴に、その関係を見い出すことができると思われる。羽山横穴の場合は円文ではなく、渦巻文を十字に切っているものであり、愛宕山横穴の場合は円文を十字に切っている点で若干の違いが見られる。渦巻文が宮城県内に見られず、円文だけだということも考え合せた場合、渦巻文も円文（特に同心円文）も、その表現した対象（物）は同一のものであったとも推定される。

## 5. まとめ

- ①. 愛宕山C地点1号墳は、両袖式家型宝形造りで、玄室、玄門、羨道、羨門、前庭からなっていたが、現在は、崩壊、沢水による浸食をうけ、羨門部と前庭部が不明となっているものと考えられる。
- ②. この横穴は、向山横穴群中で唯一の構造的特徴をもっており、装飾を有することと合せて考えてみると、群中では最高位の身分的位置を占めた被葬者であったことが考えられる。
- ③. 5体分の人骨があったこと、玄門閉塞されていること、土師器壙が羨道床面上約30cmに据えられたような状況で発見されたことなどから、当横穴においては、追葬がなされたと考えら

れる。

- ④. 羨道床面上方から発見された土師器杯が、柒財式第Ⅱ類に該当すると思われることから、横穴築造年代はそれより若干先行する時期で、7世紀後半でも中葉に近いと見ることができるであろう。
- ⑤. 玄室、羨道部から遺物がほとんど発見されなかったことから、盜掘されたことが十分考えられる。
- ⑥. 横穴の装飾文様配置については、福島県の中田横穴、羽山横穴との関連が考えられ、福島県浜通り地方との文化的交流が推測される。しかしながら、円を十字に切る文様は、新発見の文様として位置付けておく必要がある。
- ⑦. 被葬者との関連の強い遺跡として把えられるのは、仙台市の長町郡山遺跡であろう。
- ⑧. 装飾の問題は、よく、北九州地方と福島、宮城両県との関係を提起させるが、5世紀中葉～後半にかけて、須恵器の焼成技法が畿内から直接的に導入されたことが、仙台市東仙台にある大蓮寺窯跡によって確認されているので、太平洋沿岸の海上交通路が早くから確立されていたことを十分推測させてくれるものである。よって地域的な離たりを考慮するよりは、むしろそれらの文化的関連性を積極的に追求すべきものと思う。

## 参考・引用文献

- (1) 河部義平 「東國の土師器と須恵器」 帝塚山考古学No.1 1968
- (2) \* 「裝飾古墳とその保護」 月刊文化財 1978
- (3) 伊東信雄 「仙台市内の古代道路」 仙台市史3 1950
- (4) \* 「東北の裝飾古墳」 家庭と電気 1973
- (5) 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史14 1957
- (6) \* 「辺境における横穴古墳群の諸問題」 日本考古学の諸問題 1964
- (7) \* 「陸奥国分寺出土の丸底坏をめぐって」 山形県の考古と歴史 1967
- (8) \* 「群集墳と横穴古墳」 古代の日本8 東北 1970
- (9) \* 「東北横穴の問題」 日本考古学・古代史論集 1974
- 10 梅宮 茂 「東北地方の装飾古墳私考」 東北考古学の諸問題 1976
- 11 奥津春生 「大仙台闇の地盤、地下水」 1963
- 12 桑原滋郎 「クロ土師器坏について」 歴史39 1969
- 13 田辺一郎 「仙台市の風土」 仙台市史4 1951
- 14 三宅宗議 「古代」 矢本町史第1巻 1973
- 15 仙台市教育委員会 「善心寺横穴古墳群調査報告書」 1968
- 16 仙台市教育委員会ほか 「愛宕山横穴群調査報告書」 1974
- 17 \* 「宗祇寺横穴群調査報告書」 1976
- 18 仙台市教育委員会 「南小泉遺跡範囲確認調査報告書」 1978
- 19 \* 「郡山遺跡I」 1981
- 20 \* 「郡山遺跡II」 1982
- 21 \* 「栗遺跡」 1982
- 22 いわき市 「中田装飾横穴」 いわき市史・別巻 1971
- 23 鹿島台町教育委員会ほか 「大迫横穴郡」 1977
- 24 古窯跡研究会 「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」 陸奥国官窯跡群II 1976
- 25 東京天文台 「理科年表」 1977
- 26 地学団体研究会仙台支部 「新版仙台の地学」 1974
- 27 原町市教育委員会 「羽山装飾横穴発掘調査概報」 1974
- 28 宮城県教育委員会 「山畠装飾横穴古墳群発掘調査概報」 1973
- 29 宮城県瓦利町「瓦理の古墳」 1975

## 付章 愛宕山装飾横穴古墳出土の人骨

獨協医科大学第一解剖学教室

阿部修二・馬場悠男・茂原信生

芹澤雅雄・江藤盛治

### 〔はじめに〕

愛宕山装飾横穴古墳は、仙台市教育委員会によって昭和51年5月に発掘調査された。その際に数点の頭蓋と多数の四肢骨の小骨片が出土した。この装飾横穴古墳は、6世紀後半から7世紀に築造されたものと考えられている。なお、鉄製刀子破片1点、および土師器壺1点も同時に出土している。人骨には、一連の番号(A-1~12)を付けた。以下、番号順に特徴を略記する。

### 〔出土人骨の特徴〕

頭蓋A-1 保存状態はよい。しかし、右前頭部から頭頂部、そして下頸骨が欠損している(図1-1、図版1-1)。脳頭蓋・顎面頭蓋とも小さめである。脳頭蓋の上面観は、卵円形で、中頭である(図版1-1)。矢状縫合中央部の厚さは、6.9mmであり、普通よりやや厚めと言えよう(保志場1938)。顎面は、古墳時代人一般のように幅広い、扁平な印象ではない。眼窓は、やや高眼窓である。鼻根部は、縄文時代人や現代人ほどではないが、かなり隆起している。前鼻棘が発達しており、犬歯窓も窪んでいる。計測値は古墳時代女性の平均値に近いものが多い(表1)。しかし、眼窓上縁は丸く、眉弓も中程度に発達している。耳道上稜(supra-meatal crest)は、かなり発達しており、乳様突起、外後頭隆起、そして外後頭稜などの発達も男性的である。ラムダ縫合に多数の縫合骨が認められる。三大縫合の癒着度は、プロカのおおよそ2である。(岡出1962)。

歯は大部分失しており、上顎右第1・第2大臼歯のみが残っている(表3)。すべての計測値は、現代男・女性の平均値のいずれよりも小さい(表2)。上顎右第1大臼歯は、咬合面から見て右向きにやや捻れて植立している(図版1-1)。咬耗の程度は、上顎右第1・第2大臼歯がそれぞれMolnar(1971)の2と3である。上顎左第1・第2大臼歯の歯槽は閉鎖が進んでおり、生存中に歯が脱落したものと思われる。上顎左右第3大臼歯部の歯槽は破損している。

この頭蓋は、大きさは小さいが、非計量的特徴が明瞭に男性的であるから、かなりきしゃしな男性のものと考えられる。縫合癒着度や歯の咬耗などから、壮年あるいは熟年の前半と考えられる。顎面には、古墳時代人としての特徴は明瞭に現れず、むしろ、やや新しい時代の特徴が見られる。

**頭蓋A-2** 前頭骨の一部、右頭頂骨、後頭骨、そして左右の側頭骨（一部欠損）が残っている（図1-2、図版1-2）。この頭蓋は、全体的にきやしゃである。眼窩上縁は、比較的鋭く、外後頭陥起もほとんど発達していない。乳様突起も小さい方である。頭頂骨のオベリオン部の厚さは、6.2mmである。内頭蓋底のS状洞溝は、右の方が左より深く広い。縫合は、癒着していないが、骨の間隙が極めて狭い部分が認められる。

頭蓋全体がきやしゃであること、その他の非計量的特徴から判断し、女性である可能性が極めて高い。年齢は、壮年と考えられる。時代的特徴は不明である。

**頭蓋A-3** 右側1/3の前頭骨、右頭頂骨、および左側頭頂骨の後方半分、左右側頭骨、そして後頭骨が残っている（図1-3、図版2-3）。全体的に頭蓋骨の厚さは薄い。矢状縫合オベリオン部の厚さは5.5mmである。各縫合は完全に開放している。眼窩上縁は鋭く、眉弓はほとんど発達していない。側頭線や外後頭陥起も明瞭でない。

頭蓋骨が極めてきやしゃであり、各縫合が開放しているなどから、年少者であると考えられる。性別は不明である。

**上顎骨A-4** 左右の上顎骨付近が残っている（図1-4、図版2-4）。上顎骨自体は全体としてかなりごつく、大きい。前頭突起は小さいが、頬骨突起は成人男性とあまり変わらないほどである。犬歯窩は明瞭でない。各縫合は開放している。左上顎骨面の一部が破損しており、歯槽骨中に永久歯の上顎左犬歯・第1小白歯が埋伏しているのが認められる。また、上顎左第2乳臼歯の歯槽の奥に、上顎左第2小臼歯の歯冠が見られる。上顎左右第2大臼歯は未萌出である。その他の残存する歯槽骨の状況から、すでに歯冠は形成されていたと考えられる。

歯は、永久歯と乳歯が混在した混合歯列である（表3）。上顎右第1・第2乳臼歯、そして上顎左第2乳臼歯は、咬耗が進み、象牙質が露出している（Molnarの3~4）。上顎左第1大臼歯の歯根はほぼ完成しているが、根尖部は形成中である。上顎左右第1大臼歯の歯冠はほとんど摩滅していない（Molnarの1~2）。上顎右第1乳臼歯・上顎左右第2乳臼歯は現代人乳臼歯より、近遠心径は大きく、頬舌径は小さい（表2）。上顎左右第1大臼歯は、近遠心径・頬舌径とも現代人の平均値よりも大きい（表2）。

永久歯の萌出状況から、年齢は8歳前後と考えられる。年齢の割りに上顎骨がごつく、また、永久歯も比較的大きいことから男性の可能性が高い。

**上顎骨A-5** 左右の上顎骨付近が残っている（図1-5、図版2-5）。永久歯の保存も比較的良好である。上顎骨の各縫合は開放している。上顎骨の右頬骨突起は、頭蓋A-1、上顎骨A-4と比較してかなりきやしゃであり、犬歯窩も良く発達している。鼻幅は古墳時代の男・女性平均値よりも小さい（表1）。

歯冠は一般に小さめである。犬歯歯冠は咬耗により象牙質がわずかに剥離している（Molnar

の3)。他の歯冠では象牙質は露出していない(Molnarの2)。上顎右第1大臼歯の近遠心側、そして上顎左第3大臼歯の歯冠中央部に、それぞれウ触が認められる。上顎左第1・第2大臼歯の近遠心径・頬舌径以外は、いずれの計測値も現代女性平均値よりも小さい(表2)。

特別の老化現象は、認められない。また、永久歯の萌出は完了しているが、咬耗は少ない。以上のことから、青年後半、あるいは壮年前半と考えられる。右頬骨突起、および歯の大きさから判断して、女性の可能性が強い。

**頭蓋片A-6** 左側頭骨、左頭頂骨の後部、そして後頭骨の一部しか残っていない(図1-6、図版2-6)。乳突切痕は、他の頭蓋に比べて、浅く幅が広い。左乳様突起はあまり発達していない。各縫合は開放している。左鼓室部外耳道前壁に、最大径4.7mmの不定形の孔があり、下頬窩の後下部に開口している。周縁がなめらかであり、生前から存在したと思われる。

年齢は、各縫合が開放していることから、あまり老齢ではないが、詳しくは不明である。性別も不明である。

**側頭骨片A-7** 左錐体のみである(図1-7、図版2-7)。錐体上面の頭頂切痕近くの骨表面が薄くなり、海綿質がのぞいているのが認められる。特別の形質は見られない。

**側頭骨片A-8** 右錐体のみである(図1-8、図版2-8)。特記事項なし。

**大腿骨片A-9** 左大腿骨上部の小転子を中心とした長さ7cmの骨片である(図1-9、図版2-9)。小転子は大きい。下部破断面の厚さは最大10mmである。

男性と考えられる。年齢は不明。

**大腿骨片A-10** 左大腿骨上部長さ12cmの骨片である(図1-10、図版2-10)。殿筋粗面および転子間線は、良く発達している。下部の骨壁の厚さは、最大で9.5mmある。骨体上横径約29mm、骨体上矢状径約30mmであり、いずれも古墳時代の男性平均値(上横径28.9mm、上矢状径28.5mm、城1938)を上回っている。上骨体断面は丸く、むしろ現代人的である。

粗面や転子間線の発達度合い、そして骨体の太さから、男性と考えられる。年齢は壮年から熟年と考えられる。

**大腿骨片A-11** 左骨体中央部よりやや上部、長さ13cmで粗線部が欠けている骨片である(図1-11、図版2-11)。全体的に大きい。骨片の上部、中部、下部における骨壁の最大の厚さは、それぞれ9mm、6.5mm、6mmである(図版2-11)。

性別は男性と思われる。年齢は、壮年から熟年と考えられる。

**大腿骨片A-12** 右下部外側の骨片長さ7.5cm。外側上頸、粗線外側唇の一部が認められる(図1-12、図版2-12)。上部の骨壁の厚さは最大で3mmである。

性別は男性と思われる。年齢は不明である。

以上の他に、部位の同定できない小さな骨片が數十点あった。

### [まとめ]

愛宕山装飾横穴古墳より出土した骨を前述のように整理・同定した結果、左錐体が5個あることから、この横穴古墳に埋葬されていた人骨が5個体以上あることは確実である。ただし、それ以上の個体数と推定される証拠も見あたらない。頭蓋A-3と上顎骨A-4は、各特徴が似通っていることから、同一個体と考えられる。また、頭蓋A-2と上顎骨A-5は、骨の特徴や年齢、および性別が似通っていることから、同一個体と考えても矛盾はない。年齢、および性別の構成を表4にまとめた。時代的特徴は明確でないが、古墳時代の典型的特徴よりも新しい特徴が見られるところもある。

### 参考および引用文献

馬場悠男・茂原信生・芹澤雅夫・江藤盛治

1981：郭内横穴墓群にて発見された人骨「郭内横穴墓群」白河市埋蔵文化財調査報告4；87～95、付図1～4

馬場悠男・茂原信生・芹澤雅夫・江藤盛治

- 1983：戸塚山古墳出土の人骨「戸塚山第137号塚発掘調査報告書」米沢市教育委員会
- 藤田恒太郎 1949：歯の計測規準について「人類学雑誌61」1～6
- 保志場守一 1938：日本人頭蓋頂骨質ノ厚径ニ就テ「金沢医科大学解剖学教室業績29」1～118
- 権田和良 1959：歯の大きさの性差について「人類学雑誌43-1」1～176
- 城一郎 1938：古墳時代日本人人骨の人類学的研究「人類学雑誌1」1～333
- 清野謙次・宮本博人 1926：津雲貝塚人骨の人類学的研究、第二部・頭蓋骨の研究「人類学雑誌41」95～140、151～208
- 宮本博人 1924：現代日本人人骨の人類学的研究、第一部・頭蓋骨の研究「人類学雑誌39」307～451
- Molnar, S 1971: Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability. 1, 2 Amer. J. Phys. Anthropol., 34: 175～190
- 岡田幹夫 1962：関東地方日本人の頭蓋縫合の年齢変化「慈恵医大解剖業績77」112～162
- 茂原信生・馬場悠男 1979：小松原遺跡出土の人骨「茶臼塚古墳群・小松原遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書27；121～126
- 杉山乗也・黒須一夫 1964：乳歯の計測基準について「小児歯科学雑誌2(1)」1～8
- 杉山乗也 1969：日本人乳歯の計測法による形態学的研究「愛知学院大学歯学会誌7(2・3)」149～178

### [図説明]

図1：各出土人骨の保存部位（シャドウ部分）。図中の数字は人骨番号に対応する。

### [図版説明]

図版1 (図版中の数字は人骨番号に対応する)

1：頭蓋A-1 前面・左側面・下面・上面 2：頭蓋A-2 右側面・上面

図版2 (図版中の数字は人骨番号に対応する)

3：頭蓋A-3 右側面・上面 4：上顎骨A-4 前面・下面 5：上顎骨A-5

前面・下面 6：頭蓋片A-6 左側面 7：側頭骨片A-7 左錐体後面、図の上方  
が前方 8：側頭骨片A-8 右錐体後面、図の上方が前方 9：大腿骨片A-9 左  
大腿骨上部内側面 10：大腿骨A-10 左大腿骨上部前面・後面・下部断面 11：大腿  
骨片A-11 左大腿骨中央部前面・後面・下部断面 12：大腿骨片A-12 右大腿骨下部  
外側面

表1 愛宕山装飾横穴古墳、頭蓋計測値と比較資料

計測項目	測量A-1	頭蓋A-2	上顎骨A-4	上顎骨A-5	總 文(前野・富本)		古墳(城)	4	3	2	1	現代(宮生)
					♂	♀						
1 頭 頂	長 175	—	—	—	186.4 (5.38)	175.7 (6.57)	181.7 (6.39)	172.1 (4.19)	178.3 (5.44)	169.3 (4.83)	—	—
8 耳 長	大 137	—	—	—	144.4 (3.96)	141.9 (3.32)	140.8 (6.09)	136.6 (4.58)	141.2 (4.64)	137.7 (3.66)	—	—
8.1 頭 長 帽示數	大 78.3	—	—	—	77.7 (3.47)	80.8 (2.14)	78.1 (3.89)	79.1 (3.51)	79.7 (3.38)	81.5 (4.20)	—	—
2a ナリナ・イニシニス	163	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5 頭 骨 底 長	97	—	—	—	103.4 (3.80)	96.3 (2.51)	102.4 (4.78)	95.7 (2.63)	102.1 (3.57)	95.0 (3.32)	—	—
7 大後頭孔 長	34.4	37.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11 西耳 高	128.7	123.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12 杖 大後頭骨 高	113	105	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12.8 植頭頂,後頭小數	82.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13 九 火 頭 高	(103)	(103)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15 大後頭孔 高	—	30.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21 衛道 耳 高	113.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
40 頭 骨 高	(97)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
40.1 杖頭 頭 示數	55.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
41 側 頭 高	70.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
46 小 頭 高	99.7	—	—	—	103.6	100.8	102.6	98.4	100.1	95.9	—	—
48 上 頭 高	(64)	—	—	—	67.0 (2.95)	63.1 (4.00)	68.7 (4.94)	65.1 (3.49)	72.9 (4.25)	68.3 (3.52)	—	—
51(左)頭 高	40	—	—	—	43.5 (1.68)	41.6 (1.69)	43.0 (2.22)	41.5 (1.98)	43.0 (1.84)	41.0 (1.24)	—	—
52(右)頭 高	34.5	—	—	—	33.5 (1.55)	33.0 (1.85)	34.7 (2.00)	33.6 (1.59)	34.4 (1.84)	34.4 (1.67)	—	—
52.51 頭 寬 示數	86.3	—	—	—	76.5 (3.21)	81.0 (4.57)	80.6 (5.46)	81.5 (5.39)	79.6 (4.96)	83.0 (5.15)	—	—
54 鼻 高	25.25	—	—	—	26.6 (1.33)	25.4 (1.23)	26.0 (1.90)	25.4 (1.54)	26.4 (1.82)	25.1 (1.91)	—	—
55 鼻 高	50.46	—	—	—	48.6 (1.92)	45.2 (1.95)	51.1 (2.94)	48.0 (2.27)	52.4 (2.85)	48.6 (2.88)	—	—
54.25 鼻 示數	50.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
61 上顎齒 高	63.2	—	—	—	54.5 (2.40)	56.1 (3.99)	50.7 (3.94)	53.2 (4.93)	50.3 (3.95)	51.2 (4.09)	—	—
63 口 腹 高	(42.5)	—	—	—	63.5	61.1	64.4	61.6	65.9	62.2	—	—
64 全側面 高	8.0	—	—	—	36.3 (44.2)	40.3	38.1	38.3	41.5	39.3	—	—
72 全側面 角	81°	—	—	—	8.0	12.2	10.6	—	12.3	12.1	—	—
73 鼻側面 角	84°	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
74 鼻側面 角	72°	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
					81.9° (3.69°)	81.8° (2.52°)	81.5° (2.46°)	82.5° (3.35°)	83.3° (2.95°)	82.4° (2.46°)	—	—
					85.8° (3.28°)	86.6° (2.65°)	84.7° (3.69°)	86.4° (4.49°)	86.6° (2.69°)	87.1° (2.39°)	—	—
					70.3° (6.81°)	69.6° (5.03°)	73.1° (12.70°)	71.4° (8.18°)	66.6° (6.74°)	68.7° (6.51°)	—	—

表2 愛宕山猿折櫛穴古墳、齒の計測値と比較資料(上顎)

資 料番 号	1	1.2	C	P 1		P 2		M 1		M 2		M 3 歯舌径 近遠心径
				近遠心径	歯舌径	近遠心径	歯舌径	近遠心径	歯舌径	近遠心径	歯舌径	
頭蓋 A-1	左	—	—	—	—	—	—	—	—	10.22	11.16	9.54
上顎骨 A-4	右	—	—	—	—	—	—	—	—	11.27	12.09	—
上顎骨 A-5	右	—	—	6.02	7.23	7.73	—	6.50	9.03	11.49	12.06	—
現代日本人 (鶴田 1969) <sup>②</sup>	左	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	6.67	9.04	12.12
現代日本人 (杉山 1969) <sup>③</sup>	左	8.35	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47
資 料番 号	1	1.2	C	近遠心径	歯舌径	近遠心径	歯舌径	近遠心径	歯舌径	m 1	m 2	—
上顎骨 A-4	右	—	—	—	—	—	—	7.51	8.77	9.60	9.66	—
現代日本人 (杉山 1969)	左	6.64	4.98	5.47	4.91	6.91	5.99	7.39	8.84	9.51	10.28	9.86
	右	6.72	4.95	5.51	4.95	6.74	5.77	7.44	8.82	9.57	10.18	—

表3 愛宕山猿折櫛穴古墳  
上顎乳歯・永久歯の現出および保存状況

頭蓋 A-1		上顎骨 A-4		上顎骨 A-5		側頭骨片 A-7		側頭骨片 A-8		大顎骨片 A-9		大顎骨片 A-10		大顎骨片 A-11		大顎骨片 A-12	
×	○	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
M3M2M1P2P1 C 1211[1]12 C P1P2M1M2M3		○	□	□	□	☆	☆	☆	□	?	?	?	?	?	?	?	
上顎骨 A-4	上顎骨 A-5	頭蓋 A-1	頭蓋 A-2	頭蓋 A-3	上顎骨 A-4	上顎骨 A-5	頭蓋片 A-6	側頭骨片 A-7	側頭骨片 A-8	大顎骨片 A-9	大顎骨片 A-10	大顎骨片 A-11	大顎骨片 A-12	大顎骨片 A-13	大顎骨片 A-14	大顎骨片 A-15	
☆	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
M3M2M1P2P1 C 1211[1]12 C P1P2M1M2M3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
m2m1 c 1211[1]12 c m1m2		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
上顎骨 A-5	上顎骨 A-6	頭蓋片 A-6	側頭骨片 A-7	側頭骨片 A-8	大顎骨片 A-9	大顎骨片 A-10	大顎骨片 A-11	大顎骨片 A-12	大顎骨片 A-13	大顎骨片 A-14	大顎骨片 A-15	大顎骨片 A-16	大顎骨片 A-17	大顎骨片 A-18	大顎骨片 A-19	大顎骨片 A-20	
×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
M3M2M1P2P1 C 1211[1]12 C P1P2M1M2M3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

表4 愛宕山猿折櫛穴古墳、人骨の年齢および性別まとめ

資 料番 号	年 齡	性 別	考
頭蓋 A-1	生年あるいは熟年	♀	—
上顎骨 A-4	生年	♀	—
上顎骨 A-5	少 年	?	①
上顎骨 A-6	8歳前後	?	②
側頭骨片 A-7	不 明	?	③：同一個体と考えられる。
側頭骨片 A-8	不 明	?	④：同一個体と考ええてても、矛盾がない。
大顎骨片 A-9	不 明	?	矛盾がない。
大顎骨片 A-10	生年から熟年	?	—
大顎骨片 A-11	生年から熟年	?	—
大顎骨片 A-12	不 明	?	—

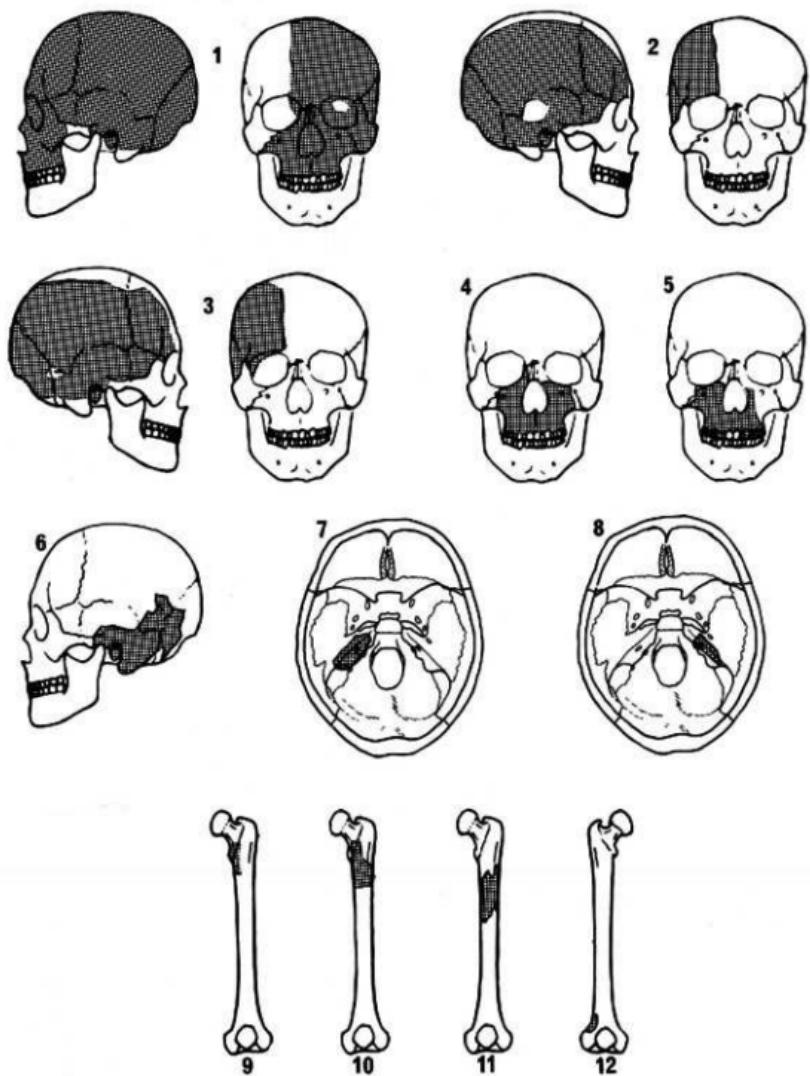
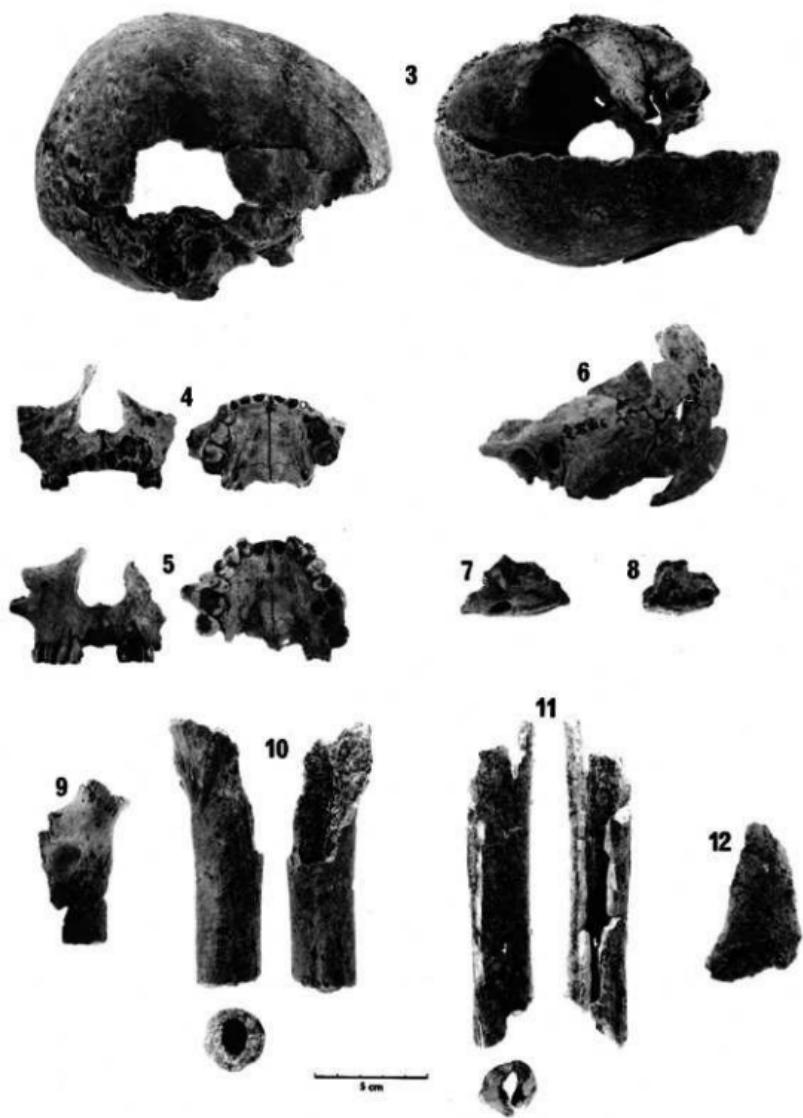


図1 各出土人骨の保存部位



図版 1



图版2

## 職 員 錄

### 社会教育課

### 文化財調査係

課長	阿部 達	係長	佐藤 隆	主事	渡部弘美
主幹	早坂春一	主事	結城 慎一	教諭	渡辺 誠
		教諭	菅原 和夫	主事	主浜光朗
文化財管理係		主事	木村 浩二	〃	斎野裕彦
		〃	篠原 信彦	〃	長島栄一
係長	佐藤政美	教諭	小野寺和幸	〃	及川 格
主事	岩沢克輔	〃	佐藤美智雄	教諭	千葉 仁
〃	山口 宏	主事	佐藤 洋	〃	松本清一
		〃	金森 安孝	主事	高橋 泰
		〃	佐藤 甲二	〃	鈴木善弘
		〃	古岡 泰平	派遣職員	高橋勝也
		〃	工藤 哲司		

### 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物靈塚下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）  
 第2集 仙台城（昭和42年3月）  
 第3集 仙台市燕沢善寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
 第5集 仙台市南小泉法領町古墳調査報告書（昭和47年8月）  
 第6集 仙台市荒巻五本松墓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
 第7集 仙台市高浪裏山古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
 第8集 仙台市向山古墳構穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
 第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
 第13集 南小泉遺跡一覧辨認調査報告書（昭和53年3月）  
 第14集 果道跡発掘調査報告書（昭和54年3月）  
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
 第16集 六反山遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
 第17集 北星敷遺跡（昭和54年3月）  
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）  
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
 第21集 仙台市開闢関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）  
 第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）  
 第23集 年報1（昭和55年3月）  
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
 第25集 三神率遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）

- 第26集 史跡遠見塚内墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
- 第27集 史跡除奥園分寺昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
- 第28集 年報2（昭和56年3月）
- 第29集 郡山遺跡I－昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
- 第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
- 第31集 仙台市開発関係調査報告書2（昭和56年3月）
- 第32集 沼ノ岸遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
- 第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
- 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
- 第35集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事關係第1次調査報告（昭和57年3月）
- 第36集 北前遠跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 第37集 仙台平野の遺跡群I－昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 第38集 郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報（昭和57年3月）
- 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 第40集 仙台市高速鐵道関係遠跡調査概報I（昭和57年3月）
- 第41集 年報3（昭和57年3月）
- 第42集 郡山遺跡I－宅地造成に伴う緊急発掘調査（昭和57年3月）
- 第43集 茅遺跡（昭和57年8月）
- 第44集 沼ノ岸遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
- 第45集 茂庭一茂駒住宅地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第46集 郡山遺跡III－昭和57年度発掘調査概報（昭和58年3月）
- 第47集 仙台平野の遺跡群II－昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
- 第49集 仙台市文化財分布調査報告書（昭和58年3月）
- 第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
- 第52集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事關係第2次調査報告（昭和58年3月）
- 第53集 中出畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第54集 神明社遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第55集 南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）
- 第56集 仙台市高速鐵道関係遠跡調査概報II（昭和58年3月）
- 第57集 年報4（昭和58年3月）
- 第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
- 第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
- 第60集 南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第61集 山口遺跡II－仙台市体育館建設予定地（昭和59年2月）
- 第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）
- 第63集 史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年3月）
- 第64集 郡山遺跡IV－昭和58年度発掘調査概報（昭和59年3月）
- 第65集 仙台平野の遺跡群III－昭和58年度発掘調査報告書（昭和59年3月）
- 第66集 年報5（昭和59年3月）
- 第67集 嵩流水田遺跡I－第一泉崎前地区（昭和59年3月）
- 第68集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事關係第3次調査報告（昭和59年3月）
- 第69集 仙台市高速鐵道関係遠跡調査概報III（昭和59年3月）
- 第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
- 第71集 後河原遺跡（昭和59年3月）
- 第72集 六反田遺跡II（昭和59年3月）
- 第73集 仙台市文化財分布調査報告書II（昭和59年3月）
- 第74集 郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報（昭和60年3月）
- 第75集 仙台平野の遺跡群IV（昭和60年3月）
- 第76集 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第77集 山山上ノ台遺跡－昭和59年度発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第78集 中出畠中遺跡II－第2次発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第79集 欠ノ上I遺跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第80集 南小泉遺跡－第12次発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第81集 南小泉遺跡－第13次発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第82集 仙台市高速鐵道関係遠跡調査概報IV（昭和60年3月）
- 第83集 年報6（昭和60年3月）
- 第84集 仙台市文化財分布調査報告書III（昭和60年3月）
- 第85集 宮城県仙台市愛宕山猿舞横六古墳発掘調査報告書（昭和60年8月）

仙台市文化財調査報告書第85集

宮城県仙台市愛宕山裝飾横穴古墳発掘調査報告書

昭和60年8月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

